福祉・セラピー

自らのひきこもりの経験からホースセラピー活動

ブルーヘイズ農場

ホースセラピーの受け手から提供者へ

活動の概要

平成元年に大島に移住した平山秀茂氏は、平成8年に与那国馬を取り寄せ、不登校や引きこもり、知的障がい者等を対象とした日本在来与那国馬保存活用サークル「ブルーヘイズ農場」を開設した。

平成24年からは、社会福祉法人 武蔵野会「大島恵の園」で与那国馬を活用したホースセラピー（馬とのふれあいを中心とした活動）を実施している。現在は 3ヶ月に1回程度、大島恵の園に出向いて与那国馬とのふれあいを提供するほか、月に 3 回三原牧場でホースセラピーを実施している。

平山氏は「ホースセラピーについては、独学で文献を調べ、「大島恵みの園」の丸山幸則氏と一緒になって手探りで実践してきた。大島恵の園の支援がなければこの取り組みは継続できなかった。」と話す。

ブルーヘイズ農場代表の平山秀茂氏

平山氏自身が引きこもりであった経験から活動には特別な思いが込められている。

「ホースセラピーの指導者は知的障がい者をはじめ、不登校や引きこもり等の経験を持つ人、心にハンディを持ったことのある人もしくは持っている人になってほしい。」と願っている。障がい者やハンディを持つ人自身がそうした人達を支援するホースセラピーの実施が目下の目標である。

また、単独で乗馬が出来るようになった利用者（知的障がい者）には、観光シーズンには三原山にて観光乗馬のお手伝いをして貰っている。自閉症の子が乗馬にとても興味を持ったり、知的障がい者が自ら馬の世話をしたりなど、自発性が顕著に改善されているとのこと。

そして「障がいを持つ者だって出来るんだ！」ってことを伝えたいと強調。馬の世話など「今回は、ここまでできた」という満足感、自信が次への意欲に結び付き、目標を持った生き方につながっている。怖い体験（馬に噛まれるなど）もあるかもしれないが、ふれあいから学べるコミュニケーションがとても大事。馬は話をすることができないが、言葉でないコミュニケーションというものがどれだけ重要かということがよくわかる。

3歳から馬とふれあっているという、現在6歳の自閉症の子どもの母親は、「馬に乗ることが増々楽しみになってきているようだ」と笑顔で話

す。障がいのある子どもにとってだけでなく、その家族にとっても笑顔になれる取り組みとなっている。これまでの経験から、馬に初めて乗る自閉症の子どもでも、鞍の上で大きく左右に揺れていても適切なサポートによって馬から落ちることは無かったという。

馬と和やかにふれあう福祉事業所の利用者

牧場では、ふれあい乗馬として以下の内容を行っている。

1．馬への餌やり・・餌のやり方、馬への近づき方、触り方等の体験
2．ブラッシング・・馬を作業柵につなぎ、体に触ったり、ブラシでゴシゴシ磨く
3．引き馬・・手綱を付け、馬を引いたり、リズムに合わせて馬と一緒に走る
4．引き馬乗馬・・スタッフが引く馬に乗ってゆっくり歩く
5．一人乗馬・・丸馬場、長めの角馬場に移動して、一人で馬に乗る
6．ブラッシング、餌やり・・馬達の労をねぎらい、ご褒美を食べさせながらブラッシング（マッサージを兼ねた）を行う

大島恵の園の大島安彦施設長は、「生き物に接することに最初は不安があったが、定期的に行うことで、山に行く楽しみ、餌やりや馬を引く楽しみが生きがいになっている。軽度から重度まで様々な入居者がいるが、今日、馬が来る日だというのが朝早くからの楽しみになっている。」といった効果を語られている。また、「馬のふれあいから餌やりなどの一連の流れを理解し、入居者が餌やり方法などを他者に教えるなど、入居者同士のコミュニケーションの向上にもなっている」という。

平山氏や職員の丸山さんは、「障がい者にとって、馬がそこにいる、馬を見るだけでも効果があるし、馬を見ている他人が嬉しそうにしているのを見るのもまた、楽しくなる。」と入所者の馬によるセラピー効果を高く評価している。

丸山さんは、また「この施設にきてから馬とふれあうことになり、施設でのふれあいやホースセラピー活動に過ごす時間は私にとても大切な時間となっている。職員自身の笑顔が増え、人間関係にも良い影響を与えている。」と、その重要性を高く評価している。

大島恵の園の大島施設長（左）と職員の丸山氏（右）

平山氏は、「与那国馬は私を夢の世界に連れてきてくれた。観光乗馬ではわからない側面がホースセラピーにはある。例えば、観光乗馬では一期

一会の社会だが、馬を通じて障がい者が一般社会人と話をする。」という、社会への架け橋を導き出してくれている。

私は、馬に関しては与那国馬しか知らないが、在来馬の良さを活かして、在来馬の保護と障がい者の社会との接点になれば良いと思う。このホースセラピーの在り方を世の中に広めたい。その為に必要な事は積極的に取り組みたい」と話す。

平山氏は 27 歳の時に日本一周の旅に出て、昭和 60 年に与那国島に到着。民家を借り生活する中で急速に馬に魅せられ、友人から 1 歳馬の与那国馬を譲り受け、飼い方、慣らし方を教えて貰った。それが、平山氏と与那国馬との出会いであった。平山氏は、「今、大島で行われているこの状況が日本全国で行われたら、どれだけの障がい者を笑顔に出来るだろう！」と夢見ている。

ブルーヘイズ農場の与那国馬

日本在来馬は比較的小型で、性格も温順であり、丈夫な事から、このような取り組みには適していると思われる。かつて大島には馬が 120 頭ほど存在し、住民にとって馬は身近な存在であり、昭和 35 年に観光乗馬組合が発足した。昭和 39 年に大島は富士箱根伊豆国立公園に編入され、本来であれば国立公園内は車馬乗り入れ禁止となるが、国立公園編入前に馬の観光乗馬を実施していたため既得権が認められ、現在山頂口から三原山山頂までの道路は、馬と人の専用道路に成っている。平山さんは大島観光乗馬組合の許可を貰い、現在大島で唯一観光乗馬を実施している。

活動体制

現在所有している馬は 10 頭。全て与那国馬系。内訳は、種雄馬 1 頭、雌馬 2 頭、7 頭はその産駒。

ゴールデンウイークや夏休み期間などの観光シーズン中は観光乗馬（三原山山頂口から三原山までの乗馬）を主に金～日に行っている。観光シーズンのオフ時期は、ホースセラピーを実施している。

三原山のセラピー乗馬は、1 分 100 円で実施。大島恵の園への馬とのふれあい訪問活動は 1 回につき 10 万円で実施。

施設の概要

ブルーヘイズ農場は、伊豆大島の南端、三原山の裾野に所在する。ブルーヘイズ農場は馬にとっての居心地の良さを念頭に、シンプルな施設となっているが、三原山裾野の乗馬トレッキングなど島の自然景観や立地がブルーヘイズ農場を支えている。

連携している大島恵の里は、社会福祉法人 武蔵野会（本部・事務局は東京都八王子市台町 1-19-3）が運営する知的障害者の入所更生施設で、大島には隣接して大島恵の園・第 2 大島恵の園がある。

社会福祉法人 武蔵野会　大島恵の園

背景（地域連携、展望等）

観光地としての可能性

大島は、東京からフェリーで 2 時間程で行くことができる。東京湾の南海上約 120km にあり、世界三大流動性火山として有名な三原山がそびえている。三原山は有史以来噴火を繰り返したことから、火山灰が積み重なり 90 層にもなった地層切断面が道路沿いに約 1km 続く景観も見られる。

都内から比較的近く、スケールの大きな海と山の自然に身近に接することができるため、観光地としても有名である。火山の景観と防災、観光の取り組みを平成 22 年 9 月にジオパーク（日本ジオパーク）として認定されている。

雄大な海と山と、国立公園内での乗馬というメリットを活かし、観光客も乗馬や馬とのふれあいでリフレッシュできる環境が揃っていることから、今後の発展が大いに期待される。

在来馬の保存地域としての可能性

大島の環境は馬の飼育育成には、最適と思える。その理由として挙げられるのが、豊かな自然環境と海水が風雨で巻き上げられ牧草などにミネラル分を多く含むことから、自然とそれを食べる馬が毛並みも良く、食欲も旺盛となる。馬は大量に汗をかくことが知られているので、塩分の補給は大切である。

与那国馬は、日本最西端の与那国島にいる鹿毛を主体とした体高 110～120cm あまりの日本在来馬である。昭和 44 年に与那国町の天然記念物に指定され、昭和 50 年に与那国馬保存会が設立された。平成 26 年現在では、全国で 112 頭が飼育されている。

本来、日本在来馬の保存には、原産地での繁殖・飼養が重要であるが、一方、疾病等のリスク分散のためには、他の地域での飼養・利活用についても意義のあるところと思われる。大島で与那国馬が飼育育成されることは、そういった面からも期待したい。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

〒100-0211　東京都大島町差木地 2 番地
(TEL)090-3043-7817